

監 査 報 告 書

平成 27 年 8 月 27 日

大学評価コンソーシアム

代表幹事 小 湊 卓 夫 殿

監査人

大 川 一 毅



浅 野 昭 人



私ども、監査人は、大学評価コンソーシアム（以下、コンソーシアム）の平成 26 年度（平成 26 年 8 月 29 日から平成 27 年 8 月 27 日まで）の業務について監査を実施しました。

その結果につき、次のとおり報告します。

1. 監査方法の概要

私、監査人は、幹事の業務執行の状況に関する監査（業務監査）に当たっては、本コンソーシアムの基本姿勢や目的・目標、運営に関する申し合わせに沿った活動がなされているかについて、幹事が行う諸活動に関する情報提供を受け、必要と認める場合には質問を行いました。また、いくつかの事業企画には実地参加して、遂行業務に関する具体的知見を得ました。

2. 監査の結果

コンソーシアムの活動については、会則および第 1 期活動方針、運営に関する申し合わせにもとづき、適正に執行されていると認めます。

以上

別添

1. 組織の目的と活動内容

全国大学評価者コンソーシアム（以下、コンソーシアム）は、組織の目的として以下3点を掲げている。

- 1) 評価を通して、大学の教育、研究、諸活動の充実につなげるための支援を行う。
- 2) 実践を基本として、役に立つ知識・スキルの共有や、事例の分析を行う。
- 3) 評価に携わるすべての人（大学、評価機関、政府等）に役に立つ活動とする。

コンソーシアムは、上記目的に基づき、H24 から5年間の行動計画として、以下2つを掲げている。

行動計画1：大学評価に携わるすべての人が「評価」という取り組みを通して、大学の改善を図っていくための理解を深めるための支援を行う。

行動計画2：評価人材の能力・スキルを明らかにし、評価人材が大学の改善のために効果的な支援が行えるような具体的なテーマを設定し、目的を明確にした評価人材の育成、資質の向上を図る。

平成26年8月29日から平成27年8月27日までの活動結果は以下の通りであることが報告された。

平成26年10月7日（火）

「IR実務担当者連絡会（パイロット版）」（神戸大学 六甲台キャンパス：14名参加）

平成26年12月4日（木）

「大学のグローバル化のための取組と指標に関する勉強会」（徳島大学 新蔵地区：13名参加）

平成26年12月18日（木）

「米国IR事情勉強会」（立命館大学 朱雀キャンパス：18名参加）

平成27年1月20日（火）

「評価作業のためのガイドライン（データ収集編）勉強会」（名城大学 名駅サテライト：22名参加）

平成27年1月20日（火）

「IR実務担当者連絡会」（名城大学 名駅サテライト：29名参加）

平成27年3月9日（月）

「米国におけるIR・アセスメント勉強会」（立命館大学 朱雀キャンパス：10名参加）

平成27年8月3日（月）

「IR実務担当者連絡会」（H27-1回）（立命館大学 大阪いばらきキャンパス：約40名参加）

平成 27 年 8 月 27 日（木）・28 日（金）

「大学評価担当者集会 2015」（神戸大学 六甲台キャンパス：118 名参加予定）

情報誌「大学評価と IR」（平成 27 年 2 月、5 月発刊）

<http://iir.ibaraki.ac.jp/jcache/index.php?page=lib>

評価と IR に関する実践事例などを年 4 回発行予定で、第二号まで発行済

2. 監査人の所見

- ・活動内容について、評価人材の育成・資質の向上を目的とした勉強会や研修会を開催するなど、現場の課題を適切に捉え、これを実施している。これにあたっては、本コンソーシアム幹事も含め、会員それぞれの多様な経験や水準（スキル）に対応した勉強会や研修等の企画開催に努力をしている。なお、本コンソーシアムの活動が評価・認知されるに従い、参加者も増加し、それぞれの立場や、所属大学の規模・設置・特性等も多様化してきた。それにとまなう参加者の期待やニーズの多様化に今後どう応じていくか、難しい課題ではあろうが、その配慮検討が必要な段階に至りつつある。
- ・最も大きな活動企画である担当者集会の開催にあたっては、対象とする評価実務担当者の参加意欲や参加満足感を高める工夫をしている。これにあたっては、幹事会を複数開催して議論を重ね、綿密な準備を行い、また企画の実施について毎年度の継続性と発展性を図っている。これらのことは本コンソーシアムに定着した特質となっており、特筆に値する。
- ・平成 26 年度は、評価と IR に関する実践事例などを掲載した情報誌「大学評価と IR」の 1 号と 2 号を発行している。これについては、活動目標(2)「実践を基本として、役に立つ知識・スキルの共有や、事例の分析を行う。」や、活動目標(3)「評価に携わるすべての人（大学、評価機関、政府等）に役に立つ活動とする。」を実現する取組として評価する。これら情報誌は、評価/IR 業務に関わる、特に職員スタッフの研究・論考発表機会として貴重かつ重要な役割を果たしている。今後の継続的発展を期待する。
- ・昨年度、監査人は、勉強会や研修会、担当者集会において、参加会員が「聴講」するだけにおおらず、それぞれの経験や工夫のプレゼンテーション機会を提供するなど「評価人材の育成、資質の向上を図ることを踏まえた勉強会や研修会、担当者集会の工夫」を一層進めることを提案した。平成 26 年度（平成 26 年 8 月 29 日から平成 27 年 8 月 27 日まで）の研修会や集会等にあつては、参加者が事前にテーマ課題等に取り組み、当日はそれを持ちよってグループ議論を進め、その成果についてのポスターセッションやプレゼンテーションを行う、といった企画も行われた。これら参加者が主体的に参画する取組は、アンケート回答を見ても満足度が高い。
- ・行動計画 2 に従い、評価人材と IR 人材を整理し、能力の段階別定義を行っており（通称：ループリック）、実態調査も行っている。その成果について、第 15 回日本高等教育学会で報告されているが、コンソーシアムの会員全体が享受できる、たとえば「スキルアップテキスト」の作成や「認定研修」の実施などの具体的成果がもたらされることを期待する。ただし、早急である必要はない。